

中国貴州省西南部の苗(ミャオ)族と布依(パイ)族の食文化(第9報)

—年中行事と行事食—

平野年秋・八田耕吉・謝立山*

Dietary Culture of the Miao and Bouyei Tribes in South-Western Guizhou Province of P. R. China (IX)

— Annual Events and Their Foods —

Toshiaki HIRANO, Koukichi HATTA and Li-Shan XIE

はじめに

調査地域の農村では、主食の水稲や家畜の飼料として重要なとうもろこしなど、食料に関するものはほとんどすべて自給自足である。これらの農作業が農民の生活のリズムを規定しているのは当然である。春節から始まる年中行事もまた、作物の栽培上適切な時期に行う農作業に合わせて行われるものと考えられる。実際に調査をすると、農作業を無事に進められるように、そして豊作を祈願するという意味を持ったものが多い。しかし、行事の期日を見ると、2月2日、3月3日、5月5日など、月と日が重なる日の行事が多いが、これは中国共通の伝統であるといわれ、この行事本来の意義はともかく、各民族の独自性をこれに乗せるかたちで現在の行事があるように見られる⁴⁾。すなわち、長い歴史の中で少数民族が漢族の影響を受け入れ、漢化が進んだ結果であろう。

年中行事にはそれに伴って行事食があり、行事と共に伝えられ行くもので、これも食文化の一つの現れである。とくに、モチ性食品は両民族に好まれており、この地域の行事食の特徴であると考えられる。

本報ではこれらのことについて面接聞き取り調査を行なった結果について報告する。

なお、苗族と布依族については、すでに本誌前号で触れられているが、ここでも簡単に紹介する。

民族について

貴州省における民族別人口と比率は苗族11.4%、布依族7.7%であるが、調査地域の自治州では布依族が29.5%、苗族7.2%と布依族の方が多い。特に册亨県と貞豊県ではそれぞれ73.2%、40.3%と布依族が多い¹⁾²⁾。

苗族

全国で739万8千人(1990)の苗族のうち約半数が貴州省に居住する。苗族の居住地域は、湖北省西南端から南にかけて、湖南省の西部、貴州省の東南部、広西の北部に至る山地(以上は東部集団)、および、貴州省中央部盆地の西側、貴州省西部山地、四川省西南部、雲南省の東南部山地、ベトナム、ラオスの山地(以上は西部集団)などに見られる。このように、苗族の

*中国科学院昆明植物研究所; Kunmin Institute of Botany, The Chinese Academy of Sciences

居住地はかなり広い地域に分散していることを考えると、貴州省は苗族の特に多い地域といえる。

苗族の起源については定説はないが、古い時代に洞庭湖付近に住んでいた「三苗」を苗族の祖先とする説がある。2000年前の秦時代¹⁾にはすでに苗族の祖先が湖南の西、貴州の東に住んでいた。この地方を当時「五溪」といい、ここに住む苗族を含めた少数民族が「五溪蛮」あるいは「武陵蛮」と呼ばれていた。この人たちは、その後次第に西に広がって現在の分布になった。苗族には朝廷の権力に対して抵抗し、弾圧された長い歴史があるが、特に清朝の徹底的な弾圧により数万人しか残らなかったと言われる。民族は山地に追われ、分散し、貧困な下層階級になっていき、孤立的排他的な集団になっていった。民国になっても非圧迫民族であった。

布依族

全国で約254万5千人(1990)の布依族のうち、貴州省に247万8千人が住む。主な居住地は、貴州省黔南布依族苗族自治州、黔西南布依族苗族自治州、安順地区のいくつかの自治県である。その他黔东南苗族侗族自治州、貴陽市およびその西北のいくつかの県にも少なからず分布する。

布依族は一般に、古代の「百越」のうち「西甌」「駱越」が源流であろうとされる。また、前漢の「夜郎」国の中心が今日の布依族の居住地に相当するため、布依族は「夜郎」に源流をもつという説もある。南北朝から唐代にかけて、布依族とチワン(壮)族はいずれも「俚僚」「蛮僚」などと呼ばれていたが、五代(907~960)以降布依族は「仲家」と呼ばれ、チワン族とは分かれていった。古くから部族によっていろいろな自称があったが、解放後「布依族」を統一名称とした。

調査方法および調査地域

調査地は黔西南布依族苗族自治州のうち、興義市、興仁県、貞豊県、安龍県および册亨県である。本報では年中行事および行事食について、主として興義市、貞豊県、册亨県、安龍県における調査の結果を報告する。調査は面接聞きとり法で行なった。

結果および考察

農業カレンダー

調査地域は標高約400mおよび1200mの範囲を含み、それぞれの作物にも一部違いが見られるので、農作業カレンダーとして年間の農作業の概要を示す(表1, 2)。標高の低いところは気温が高く、さとうきびの栽培が行われていて水田の農閑期がさとうきびの収穫期にあたり、実質的に農閑期はない。

年中行事と行事数

年中行事のうち民族によって行事の名称や期日、年間の行事の数がどのように異なるかを、表3に示した。

表3に示す行事名はほとんどの人がこのように答えたもので、普通に用いられている名称である。たとえば五月五は端午節という名称があるが布依族や苗族の人たちはそう呼ばないという。表3の頻度は、それぞれの行事のうち行くと答えた人の割合で、春節、七月半、五月五の頻度が高い。しかし、どの行事が大切な行事かという問いには、第1に春節、次いで七月半、三月三と答える人がほとんどであった。たしかに三月三も高い頻度を示す。他の行事で両民族間に頻度の差が見られるものもあるが、数値が低く、民族間の差とすることは適切でないと考えられる。查白歌節は興義市の布依族の祭りであり、他の地域には無いものである。

民族別・地域別に集計した、年間に行う行事の数を表4に示した。

表1 農業カレンダー(興義市周辺、標高1000m~1200m)

1月	15日までは農作業は休み。 16日以降、まず田起こしを始める。
2月	中旬からとうもろこしの播種。 田起こしと、粃播き。3月15日頃まで。
3月	中旬まで粃播き。とうもろこし畑の草取り、施肥。
4月	中旬までに、水田に水を張り、田植えの準備をする。
5月	中旬までに、代かきをし田植えをする。 さつまいもを植え付ける。
6月	中旬までに、水田の中耕、施肥。
7月	中旬までに、とうもろこしの収穫をする。 この後、水田の水落とし。
8月	中旬から稲の収穫が始まる。
9月	中旬までに稲の収穫。 中旬から・・・
10月	さつまいもの収穫。 中旬までに、小麦、油菜、そらまめなどの播種。
11月	中旬までに、小麦や油菜などの、中耕、施肥。 この頃まで、収穫の後処理、供出の作業があり、忙しい。 燃料の柴の準備などをする。 その後は、休息し、ついで春節の準備に入る。

注) 興義市周辺、興仁県あるいは貞豊県では農作業の時期には大きな差異はない。栽培されている作物によっては、多少のずれが見られる。

表2 農業カレンダー(白層村。北盤江沿いの標高400mくらいの地域)

1月	さとうきびの栽培をしているので、冬でも忙しい。11月から正月頃までさとうきびの収穫。正月も忙しい。
2月	さとうきびの植え付け。とうもろこしの播種。
3月	粃播きの準備。小麦の収穫。
4月	中旬までに、苗代に水を張り、粃播きをする。
5月	田植えをする。 とうもろこしの中耕、施肥。
6月	水稻、さとうきび、とうもろこしの管理。油桐の草取り、中耕。
7月	稲、とうもろこしの収穫をする。
8月	収穫が終わった畑に野菜を播く。春夏は暑いので野菜の栽培はあまりよくない。
9月	野菜畑の管理。豌豆、そらまめ、にんにく、葱、とうがらし、トマト。 さとうきびの中耕管理が大変な仕事である。
10月	9月から10月、油桐の収穫。落ちた実を集めて運び、皮をとって種だけにする。
11月	さとうきびの収穫が始まる。

注) 北盤江沿いの白層鎮や、南盤江沿いの地域では、さとうきびの栽培が行われていてこのための農作業が他の作物のための作業に影響を及ぼしている。

表3 年中行事実行頻度

行事	民族	
	苗族	布依族
春節	100%	100%
正月十五	41	67
二月二	65	37
三月三	94	93
四月八	47	41
五月五	100	93
六月六	76	78
查白歌節	0	26
七月半	100	96
中秋節	59	81
重陽節	82	67
十月一	18	37

注) 各行事について行うと答えた人の割合。

表4 民族, 地域別行事数

	興義	貞豊	興仁	安龍册亨	全体
苗族	7.0	9.4	6.8	6.0	7.8
布依族	8.5	8.5	9.0	7.1	8.1

両民族全体としては、やや布依族の方が行事数が多い傾向であるが、苗族を見ると地域間の差が大きい。調査地の農業生産の条件等について観察したところでは、苗族は生活条件の悪い山地に生活している場合が多い。表中の低い数値は農業の条件が悪く経済的条件が悪いために年中行事も少なくしている事を示している。貞豊県の苗族のように、苗族は生活の条件がよければ祭りを多く行う傾向が強いことが推定される。

年中行事と行事食

年中行事に関しては布依族も苗族もかなり漢化され、互いに共通の内容の場合が多い。また、苗族についての聞き取り調査の例が少ないこともあって、以下には主として布依族の農家で調査した結果について述べる。特に苗族と布依族で差があると考えられることについてはそれを記す。行事の内容と行事に伴う食品や料理について、すべての人たちがこのように行うというわけではないが、多くの農家で聴取したものをあげる。農作業や年中行事の期日はすべて陰暦によって行われている。

春節

春節(旧正月)の準備の大切なことの一つに、年豚(正月用の豚という意味)の処理がある。だいたい12月27日前後に行われ、ほとんどの家庭で1頭の豚を春節用にころす。このとき、燻製肉、中国式腸詰め(香腸)、ラードを作り保存食とする。また、血腸や血豆腐をつくる家庭もある。肉の一部や内臓は春節の料理に使われる。豚を処理する日は、家族の十二支と一致する日を避けるという家もある。豚の頭は春節に無くてはならないものである。また、鶏も春節の必需品である(図1)。

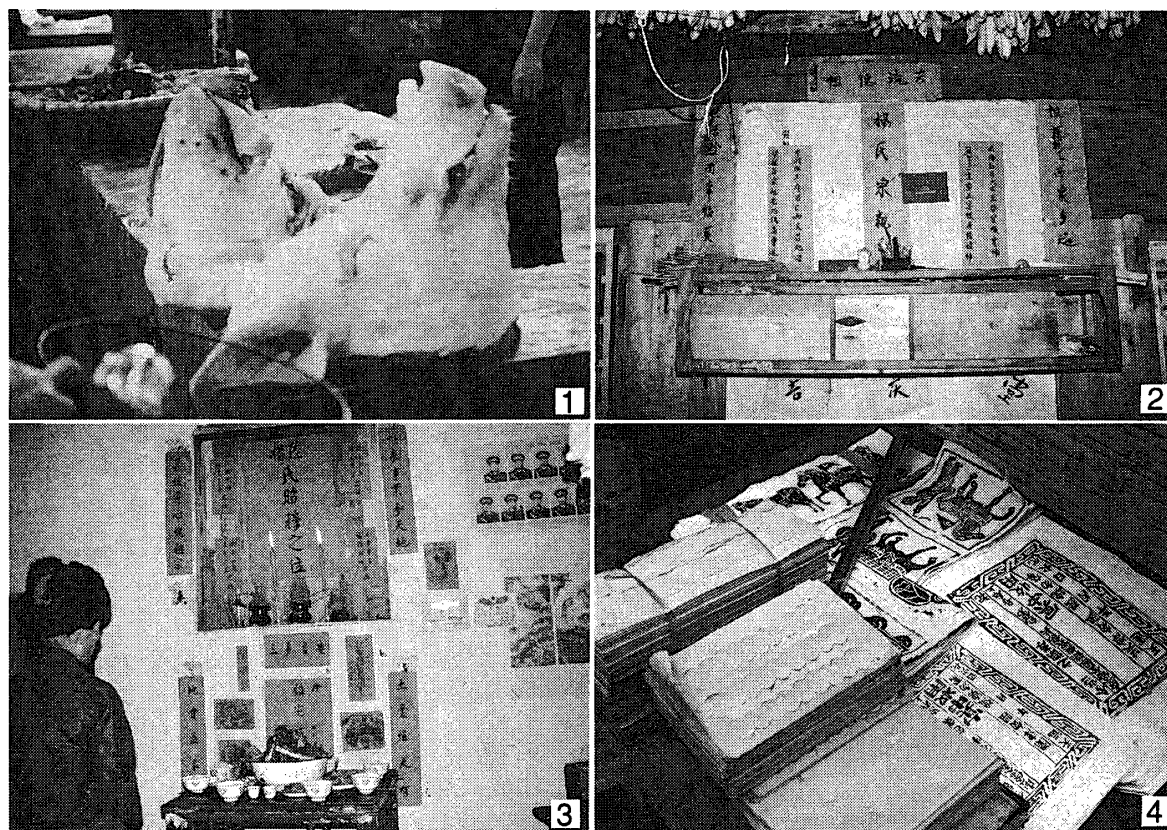


図1 年中行事と行事食(1) 1 豚の頭 2 祭壇 3 大晦日の料理を供える
4 紙銭 (丸い銭を連ねたような切れ目を入れた紙)

これと前後して、粿粿(餌塊粿, アルクワイパ)をつくるという家が多い。これにはウルチ米を、平均すれば60kg前後を当てる。しかし、25kgから150kgと使用量には幅が大きい。水餅にして保存し、何か月もの間食べるために多くつくられるが、耕地の条件によっては米の収穫量が家族の年間の食料として不十分な場合もあり、この場合は餌塊粿の量も少なくなる。

餌塊粿は春節以外の行事にはつくらないので、春節のための特徴的な食品といえるが、これをつくらないという布依族の家もある。

モチ米の搗きもちである糍粿(ツパ)もつくる。年末につくる家もあるが、元日払暁に水汲みをし、この水で糍粿を搗く家もある。早く水汲みをした人は豊作に恵まれるという。モチ米の使用量は30kgから60kgである。糍粿は、嫁が里帰りするときのみやげや親戚へのみやげに使われる量が多いので、そのような用途が多い家庭では多くつくる。正月にもち(糍粿)をつくらないと、嫁はその家になじまないという言い伝えがある(図2)。

日本の鏡餅に似たものをこしらえて祭壇に供える家もある。以下、いずれも册亨県の布依族の家で聞いたものである。(例1)丸もちを3個重ねて、その上に豚肉、鳥肉料理を入れた茶碗を乗せる、というもの。(例2)20cmくらいの丸もちの中に肉餡を入れたもので、上に3個の丸い小さいもちを乗せる。(例3)表面に3か所、半球状の膨らみをつくった直径十数センチの糍粿を、細長い粽粿を並べた上に乗せる。

また、ちまき(粽粿, ツオンパ)をつくる場合もある。平均20kgのモチ米を用いる。必要な分だけゆでて食べるが、みやげ物としても使われる。

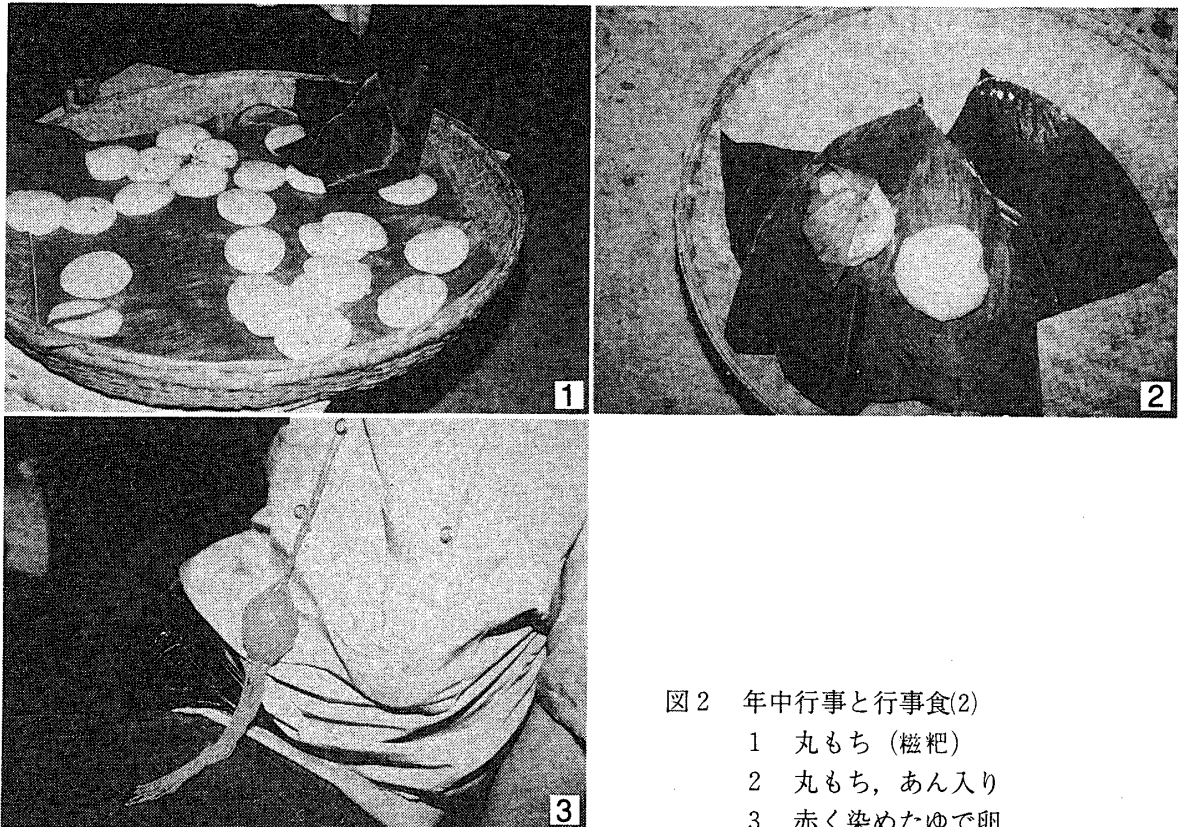


図2 年中行事と行事食(2)

- 1 丸もち (糰子)
- 2 丸もち, あん入り
- 3 赤く染めたゆで卵

その他、大掃除をする、春聯（家の戸口の上や、左右の柱などに貼る、めでたい言葉を書いた赤い紙）をつけかえる、などの迎春の準備をする。30日（大晦日）は朝から家族そろって、先祖の祭壇に供えるための料理の準備をする。

大晦日の夜が春節のうちで最もご馳走である。豚の頭、豚肉、内臓、ソーセージ、豆腐、家鴨、鶏などの料理、長菜（たかな、はくさいなど）の料理をつくる。長菜とは、たかなやはくさいのような長い野菜を切らないで、スープで煮たものが普通であるが、長菜のなかには、野菜に熱いスープをかけて瓶に入れ、酸味が出たものを食べる、という例もある。

夕刻になると、すべての料理を祭壇の前に供えて、爆竹を鳴らし、線香をたき、お参りをしてから年越しの食事を始める。この時の食事を団圓飯と呼ぶ。団圓飯とは一家団樂の食事という意味で、春節などの場合に用いる名称である。この日は一晩中線香を絶やさず先祖と一緒に過ごすので、眠れない。雄鳥が鳴くと年が明け。子どもたちは村中をまわって拜年し、爆竹をもらう。あるいは、元日の午後、子どもたちは村中の家をまわって拜年（年始回り）し、お金やひまわりの種をもらうという村もいくつかある。

大晦日と元日は家で過ごす。2日には親戚や友人宅に拜年に出かける。また、2日には嫁いだ女性が里帰りする。実家へのみやげには糰子、粽、豚肉、鶏肉、紅糖、みかん、うどん、タバコなどがある。みやげの糰子の量は、10kgくらいという家、また、結婚後最初の年は250個、2年目は200個、3年目は150個というように減少し、最終的には50個になるという家もある。

ご馳走を食べて過ごすのは、3日まであるいは5日までという家が多かった。しかし、15日まで宴会を続けるという苗族の家もあり、経済状態等によりかなりの差がみられるようである。

子どもたちの正月の遊びには、木の独楽まわしや、羽根突きに似た遊びがある。若い男女は

お手玉投げをする。互いに好意をもつ相手に投げる。お手玉は、25cm角くらいの、中に綿と綿の実あるいは砂を入れて四隅に房を付けたものである。

元宵節、過十五

正月15日。春節のようなご馳走をする家、普通よりもすこしご馳走をするという家などまちまちである。この行事に特徴的な食品として、ある布依族は湯圓(タン ユエン)をあげた。これは、搗ったえごまの砂糖味の餡を入れた白玉団子で、ゆで汁と共に食べるものである。しかし、湯圓は春節に食べるという家もある。

苗族の人たちは、嫁いだ女性がこの日に実家に帰りをし、墓参りをするという。これは7月15日にも行われる。

この日をもって了年(お正月の終わり)とし、翌日から農作業を始める人たちもある。

了年

正月29日または30日。正月を思い出すような、普段よりもご馳走をする。

二月二、アル ユエ アル

2月2日。もとは漢族の行事(春龍節などの名称)であったためか、本来の行事の意味はよく解らないという人が多かった。興義市緑化村および興仁県では龍抬頭という行事名であるという。白龍をまつ。つまり龍は天にいて天候を支配する存在であるから、龍に雹が降らないように、作物がよく育つように祈る。染めおこわをつくる。

各家庭から5角(当時日本円で約10円)ずつ集めて、2羽の雄鶏を買う。村の長老(寨老)が集まって、井戸のところで雄鶏を殺し、料理して食べる。食べるのはこの長老たちだけ。紙銭を燃やし、線香をたく。これには鶏を生け贄として捧げ、血で清めるという意味がある。

苗族の人たちにとっては、龍抬頭の意味よりも、里帰りした女性がそれぞれの婚家へ戻る日という意味が強いようである。新婚の妻は結婚以来初めて婚家へ戻る日である。

みやげには、鶏、豚肉、赤くあるいは赤、黄、緑に染めたゆで卵、糍粑などを持って行く(図2)。糍粑の量は、新婚の年は(丸もち)250個、2年目は200個、3年目は150個、その後は50個くらい、などというところや、いつも50個くらいというところなど地域や家によって違う。みやげの内容や量は、経済状態によっては話し合いで決める。

三月三、サン ユエ サン

布依族でも苗族でも、墓の掃除をし、墓参りをして先祖を祀るという行事が一般的である。墓の掃除をし、鶏、染めおこわ、豚肉、などの供えものをし、お参りをする。線香をたき紙銭を燃やす。村中で1頭の豚を殺し、家の代表が出てまずこれを食べ、後で各家に分けて墓に供えるという村もある。春節、七月半とともに重要な行事である。

この時期は農繁期を控えているのでご馳走をし、体力をつけるという意味もある。

これと異なった例を以下にあげる。

(興義市緑化村、布依族)三月三は「掃寨」ともいう。各家庭から2~3元(40~60円)ずつ出して1匹の犬を買う。若い未婚の男2人が棒で犬をかついで各家をまわる。このとき算命先生(占い師)がついてゆく。村人たちもついてゆく。各家の煉瓦をひとつまみくらいずつくだけて家のまわりに撒く。人々が戸口から出た後、算命先生が水を戸口にかける。火事や病気に

ならないように、という意味の行事であり、水で清めるので掃寨と呼ばれる。全村(寨)まわった後、村人は全員ある決まった場所で犬を殺し、料理する。各家では、ご飯を用意し、どんぶりを一つ持って行って狗料理をわけてもらって、そこで食べる。この場所は昔から決まっていて、この日のためだけに使う。

この村の潘、賀および楊の姓の一族は、3月には「猴場虎場」と呼ばれる行事を行う。これは山の神の祭りである(これらの姓が村でもっとも多い)。3月の暦で猴の日と虎の日のうち先にきた日に行く。各家が3元ずつ出して1頭の豚を買う。2人の老人、2人の中年、2人の未婚の男の6人で豚をかついで山に入って殺し、料理して食べる。この山は決まっていて、祭山林という。残りの肉は3種の姓の家庭に分ける。各家では料理をつくり、先祖の祭壇に供え、次に庭で山の神に供えて祈る。この豚はこの家庭の人以外は食べてはいけない。山の神の祭りは3日間で、この間は仕事をしない。6月22日にも同じ行事をする。この緑化村の例は、限られた氏族の間で行われる行事であるが、他にもこのような例はあるものと思われる。

四月八、開映門(カイ ヤン メン)ともいう。苗族は牛王節

4月8日。地域により少しのずれはあるが、田植えなど農作業の忙しい時期なので、普段より少しご馳走をして、田植えを手伝ってもらおう人たちに振る舞って体力をつけてもらう。糍粑をつくる。布依族の家では牛王節という行事は2か所だけであったが、苗族は一様に牛王節の日であるという。糍粑をつくり、牛の左右の角に付ける。このもちを牛王粑という。牛をいたわるという意味がある。

五月五、端午節

この日は、五月五(ウー ユエ ウー)と呼ばれるのが普通で、必ずしも端午節とは呼ばれていない。布依族も苗族も同様に、粽粑(ちまき)をつくり、鶏、豚肉などの料理を食べる。いくらかの家では、蓬と菖蒲を束ねて戸口に立てる、雄黄酒を飲む。雄黄酒は、砒素の化合物(雄黄)と蒲の根を刻んで焼酎に付けたもので、魔除けに使われる。

粽粑がどこでも共通であるが、册亨県ではこの他に搭連粑をつくる。搭連粑(ターリェンパ)は白玉粉を水で練り芭蕉の実で甘味をつけた「ういろう」のようなもちである。形は数センチ角の座布団様で、25cmほどの幅の芭蕉の葉の両端近くにこれを2個置いて巻き、やや平たくする。これを茹でたものである(図3)。

六月六、リュウ ユエ リュウ

布依族の村では田の神の祭りである。苗族でも同様に、稻田の害虫が少なく豊作になることを祈る行事という家もあったが、布依族ほどはっきりした意義は聞かれなかった。

糍粑、染めおこわ、粽をつくる。鶏料理あるいは田の畦で殺した鶏の血を田の神に捧げる。染めおこわ、などの料理を碗に入れて畦に置き、線香を立て、赤い紙の幣を50cmほどの割り竹に付けて畦に立てる。害虫から水田を守ってもらうよう祈り、紙銭を燃やす(図4)。

查白歌節

6月21日。興義市頂效鎮查白村で行われる、この地方の布依族の歌祭りである。これは、古くから布依族に伝わる查郎と白妹の物語による。昔、查郎と白妹という善良な青年男女がいて、互いに深く愛し合っていた。ところが、どん欲な金持ちが聡明な白妹を奪い、查郎を殺してし

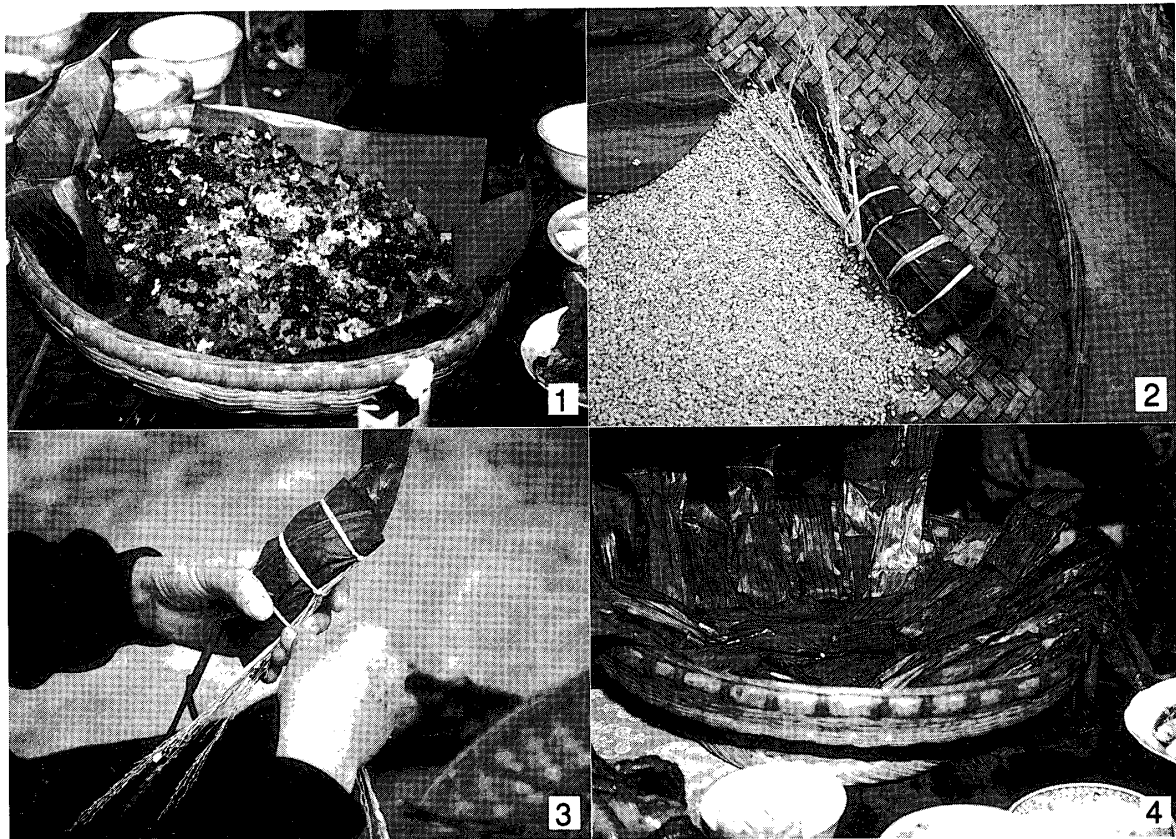


図3 年中行事と行事食(3) 1 染めおこわ 2 ちまき, モチ稲のわら灰を混ぜたモチ米
3 ちまき, くずうこんの葉で包む 4 搭連粿



図4 查白歌節, 六月六
1 查白歌節のステージ
2 查白歌節に参加する人々
3 六月六の供えもの

まった。白妹は悲憤慷慨のあまりその金持ちの家に火を放ち、自ら火中に身を投じて愛を全うした。後の人が、暴力を恐れなかった二人を記念して、査郎が殺害された場所を査白と名付け、白妹が愛に殉じた6月21日に“歌祭り”を行うことにした。

村には歌祭りのステージ（恒久的な）が建てられていて、近辺の布依族ばかりでなく苗族の人たちも、また雲南や広西からも人々が集まり、4～5万人もの人が祭りを楽しむ。ステージの上では多くの男女のグループの歌の掛け合いや演奏が披露される（図4）。

大山祭

6月24日。興義市の布依族の祭りである。染めおこわをつくる。村で1頭の牛を殺し、山の神に供える。豊作祈願をし、後で村人全員が牛を食べる。解放前は牛であったが、解放後は、牛は役畜として大切だから殺さないようにという指導が政府からあり、その後は豚に変わった。さらに、現在は染めおこわだけのところもある。

七月半、チー ユエ パン

7月15日。鬼祭り、または鬼の祭りという呼び名もある。鬼とはあの世の人（先祖）のことである。先祖の祭壇に、鶏、染めおこわ、豚肉か牛肉料理を供える。線香をあげ紙銭を燃やす。戸口でも線香をたく。祭壇のほかに戸口、かまど、門でも紙銭を燃やす。この灰は川に流す、あるいは家の回りに撒く。むやみなところに捨ててはいけない。搭連粿、糍粿、赤いゆで卵をつくることもある。ご馳走の程度は村や家によって異なる。村で牛を1頭殺すというところもある。

七月半の遊びとして、秋千（ぶらんこ）をするという村もある。

苗族では、先祖を祀る行事という点では布依族と同じといえる。しかし、嫁いだ女性が里帰りする日であるという点では、布依族とは異なる行事である。里帰りの時のみやげは、無いところもあり、決まっていないようである。鶏や豚肉の料理をつくり墓に供えて、線香を立て、紙銭を燃やして先祖の供養をする。家に帰って皆で食事をする。

中秋節

8月15日。糍粿をつくる。糍粿、胡桃、甘栗、ピーナッツ、ひまわりの種を庭で月に供える。月餅を買うこともある。

重陽節

9月9日。糍粿をつくる。特別の行事はない。中には収穫の祝いという意義を持たせるところもある。また、この日の水が良いので、春節用の酒をこの日に仕込むと良いとする家もある。

折刀粿節

册亨県の村で、新米のモチ米で糍粿をつくり収穫を祝うというところがある。このときの糍粿を折刀粿とよぶ。形などが変わっているわけではなく、普通の糍粿と同じものである。折刀というのは、モチ稲を穂刈りするときの刃物であり、石包丁と同じ形である。モチ稲は籾が落ちにくいので穂刈りをして、うすで糍摺りをする。

牛王節

10月1日. 糍粑をつくり, 牛に2個食べさせ2個を角につける. 牛の農作業の労をねぎらう. 苗族の村では2カ所で聞いたのみである(杉脚村, 緑蔭村). 布依族の村でもこれを聞いたのは4か村である. この行事はあまり広く行われていないようである.

12月23日

かまど祭り. これは册亨県の2か村で聞いたものである. 糍粑をかまどに供える. かまどをこの日に修理する. もとは漢族の祭りで, 華北では23日, 華中以南では24日に行われるものである³⁾.

以上述べたように, 苗族や布依族の年中行事は中国共通の伝統行事の中に, 民族特有の内容が組み込まれたかたちになっていると考えられる. そのうちで民族特有のものは何かとすることについては, 農民たちにたずねても解答は得られなかった.

要 約

中国貴州省西南部の苗族と布依族の年中行事と行事食を調査した. 概要は次のとおりである.

1. 年中行事は中国の共通の伝統行事に組み込まれたかたちになっていて, 民族固有のものを見分けるのは困難である.
2. 年間の農作業の進行に従って行われる行事が多い.
3. 染めおこわや糍粑などのモチ性食品がよく作られる行事食である. また, このことは両民族ともモチ性食品に強い嗜好を持っていることを示している.

(本研究は名古屋女子大学生生活科学研究所の機関研究の一環として行なったものである.)

参 考 文 献

- 1) 国家民委民族問題五種叢書編集委員会「中国少数民族」編写組: 中国少数民族, pp.445~468, 人民出版社(1981)
- 2) 村松一弥: 中国の少数民族, 毎日新聞社, (1973)
- 3) 大林太良: 正月の来た道, pp.33, 小学館(1992)
- 4) 横山廣子: 年中行事と民族関係, 儀礼・民族・境界(竹村卓二編), pp.105~142, 風響社(1994)